

平成 23 年度オープンキャンパスについて

今年度も、8月10日に高校生を対象とした佐賀大学オープンキャンパスが開催され、医学部においても、猛暑の中、大勢の高校生や受験希望者が訪れました。



臨床大講堂において午前中は看護学科、午後は医学科について、教員や学生による学部・学科紹介や体験談の紹介、平成 24 年度入試概要の説明などが行われ、各説明会では立ち見の方も出るほどの盛況ぶりでした。説明会と並行してフリータイムでの医学部見学や模擬授業、模擬 PBL、体験実習などが行われ、いずれの企画も大盛況で、多くの参加者が医学科および看護学科における学習を体験しました。



また、模擬 PBL、体験実習、個別相談などでは、数多くの学生がボランティアとして関わり、本学部の特色や魅力をアピールしてくれました。
(学生サービス課)

第 19 回医学・看護学教育ワークショップに参加しました

去る 8 月 19 日に、平成 23 年度第 19 回医学・看護学教育ワークショップに参加しました。これは大学の教員の能力を向上させるための FD (Faculty Development) と呼ばれる企画で、教員の出席が義務付けられています。

今回のテーマは、「ティーチング・ポートフォリオについて」でした。ポートフォリオとは元々「紙ばさみ」の意味で、他の職種では、たとえば、アーティストやデザイナーが自分の作品を集めたものを指します。今回のワークショップは、「教育活動のポートフォリオ」ということで、教員にも聞き慣れない内容であり、まず、愛媛大学総合医学教育センターの小林直人先生から、特別講演がありました。ティーチング・ポートフォリオとは、ただ単に個人の教育に関する資料を寄せ集めただけではなく、「自らの教育活動について振り返り、それを、自らの言葉で記し、多様なエビデンスによってこれらの記述を裏付けた、教育業績についての厳選された記録」と説明がありました。教育をする者が、日々の取り組みを振り返り、自分の教育理念を明確にし、自分を再発見し、今後の教育を考えるピン



トにする、ということと理解しました。

続いて、佐賀大学での取り組みの説明があり、実際に、自分のポートフォリオを作成する演習をしました。自分の活動を、糊付きメモ用紙に書き、重要な順に A3 の紙に貼りながら、振り返りをしました。2 人組みになって、相手の人は、聞きながら、振り返りを促していきました。最後は佐賀大学のポートフォリオ学習支援統合システムに入力し、1 日のワークショップを終えました。



自分の根底にある「大事なもの(教育理念)が明確になり、「すっきりした」気分になりました。しかし、特に医学教育

では、学習者が身につけるべき内容の全てを網羅するためには、教育する側が自分の理念を明確にただけでは不十分で、その教育者が担うべき役割や教えるべき内容は、今回のポートフォリオと別に考えないといけないと思いました。
(江村正)

文部科学省 GP「実践臨床医養成への問題基盤型学習の実質化」が終了しました

本学では H20-22 年度に、文部科学省 GP の支援を受けて、カリキュラム改革を行ってきました。その骨子の一つは、本学の教育課程 Phase における教育方略の柱である、問題基盤型学習 (Problem-based Learning : PBL) を効果的に実施するために、TBL (Team-based learning ; チーム基盤型学習) を導入し、PBL と併用することでした。

PBL は症例シナリオを用いたグループ討論を基盤に、学生主導の自己学習をすることによって、症例に基づいた知識の習得、各人の理解度に応じた学習が可能となりますが、学習の網羅性に欠け、学生による個人差が著しいこと、多大なリソース (時間、教員) の効果的活用などの課題があります。それらを解決するために、PBL に TBL を併用するようになったものです。TBL は、PBL 同様に、症例課題を用いたグループ討論を軸とした学習ですが、指定された事前学習を行い、その確認テストを受けたうえで症例検討を行うことが、PBL とは異なります。グループ討論は教員が主導し、要点を押さえた討論を誘導します。

約 1 年の実践を経て、7 月に学生に対するアンケート調査を行いました。アンケートからは、TBL という新たな教育方法にとまどいながらも適応している様子、基本的知識を身に付けた上での応用の訓練の効果を感じている様子が見て取れました。一方で、教員間による TBL の質の違い、TBL の進め方や事前学習課題の指定方法について、学生の立場からの的確な指摘が得られました。

H23 年度は二年目の PBL・TBL ハイブリッドカリキュラムとなります。学生からの貴重なフィードバックを生かし、PBL・TBL それぞれの特性を生かしたユニット構成としていくよう、Phase 担当者一同、取り組んでいきたいと思いません。
(小田康友)

教育広報部会

小田康友、市場正良、吉田和代、
江村正、古賀明美、本間治
ご意見をお待ちしています (oday@cc.saga-u.ac.jp)